

2025年 5月 18日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「権力と信仰生活」 ローマの信徒への手紙 13章1-14節 森田信義さん

生活支配者への従順

13人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。2従って、権威に逆らう者は、神の定め^に背くことになり、背く者は自分の身に裁きを招くでしょう。3実際、支配者は、善を行う者にはそうではないが、悪を行う者には恐ろしい存在です。あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。4権威者は、あなたに善を行わせるために、神に仕える者なのです。しかし、もし悪を行えば、恐れなければなりません。権威者はいたずらに剣を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです。5だから、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです。6あなたがたが貢を納めているのもそのためです。権威者は神に仕える者であり、そのことに励んでいるのです。7すべての人々に対して自分の義務を果たしなさい。貢を納めるべき人には貢を納め、税を納めるべき人には税を納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は敬いなさい。

隣人愛

8互いに愛し合うことのほかに、だれに対しても借りが^あってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。9「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」、そのほかどんな掟があっても、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます。10愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。

救いは近づいている

11更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。12夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。13日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、14主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

ローマの信徒への手紙、今日はその15回目です。13章全体を学びます。前回の12章から具体的な信仰生活についてパウロの考えを述べているが、それは本日の13章にも続いている。この手紙は、紀元 A.D.57年初め、現在のギリシャのコリントに3カ月滞在した時に書かれたようである。当時のローマの教会は、キリスト信徒が一つのまとまった団体として教会を形成していたのではなく、キリスト信徒たちによって構成されたいくつかの信仰の家族の集まりであったようである。この手紙が書かれた頃には、ローマの人々をはじめ異邦人キリスト者が圧倒的にその主流を占めていたようである。パウロは、イエス・キリストを神の子と信じ、また全能の神を信じるキリスト信徒が、当時絶対的主権をもつローマ帝国の首都ローマに住んで生活する時、様々な規律や制約があり、この世の権力と信仰生活との関係をどのように捉えて信仰生活をすべきかについて思いをはせ、この章で述べているのだと推測する。

今日の聖書箇所については、信仰者と政治的権力の関係について如何に解釈すべきか、今まで多くの議論があった箇所である。私は、13章1節の新共同訳聖書の権威という言葉、聖書協会共同訳聖書の権力という言葉に換えて話させていただく。と言うのも、ここでのパウロの言葉が、神学的に国家との関係を言っているのではなく、一般的な勧告であり、使われている用語もヘレニズム世界、すなわち古代オリエントとギリシャ文化が融合したギリシャ風の世界の地方行政用語が使われていて、

全宇宙を創造された神的権威によって建つ国家権力についてではないようである。すなわち、ローマの治安機関や役人に対してどのような態度をとるべきかの訓戒であって、ローマ帝国や国家に対するキリスト教的理解を示しているわけではないようである。

パウロは、今、社会にある権力は、すべて神によってたてられて許されているので、その権力に従うべきである。支配者は、善を行う者にとっては恐るものではないが、悪を行う者には恐ろしい存在である。だから、善を行いなさい。貢とあるが、租税、いわゆる税金で、今で言う所得税や消費税や固定資産税等であり、また税とあるが、これは現在で言う関税である。パウロは、税金や関税は、納めるべきところに納め、恐るべき人は恐れ、敬うべき人は、敬いなさいと言っている。

この箇所を読む時、本日の招詞にも掲げたが、イエスと、祭司長や律法学者たちとの皇帝への納税についての問答を思い起こす。ルカによる福音書20章20~26節に記載されているが、イエスは「デナリオン銀貨を見せなさい。そこには、だれの肖像と銘があるか。」と問い返し、彼らは「皇帝のものです」と言うと、イエスは「それならば、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。」と言って、彼らの策略に乗ることなく、淡々と、当時の制度に従って、すべきことをするように答えている。また、イエスの12弟子の一人に、熱心党のシモンがいるが、イエスは熱心党のような行動はとらなかった。イスラエルの人々は、神を信じながら、苦しいこの世の生活の中で、神に、救い主の到来を求めてきた。聖書

の神は、イスラエルの民に、救い主を与える約束をした。

聖書が書かれた目的は、イスラエルの人々と神との歴史の後半に現れたイエスとは一体何者なのか、ということであると言われている。旧約聖書の中には、アブラハムの子孫の数えきれない増加、すなわちイスラエル民族の繁栄の約束が書かれ、ダビデの子孫から、神によって王座が堅く据えられる王国の王が出るとの予言と共に、イザヤ書53章に記されている、見るべき面影もなく、輝かしい風格も、好ましい容姿もなく、軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている苦難の僕の救い主の姿の予言がある。パウロは明確に彼の全宣教活動を通し、屠り場にひかれてゆく小羊のように十字架に架けられて死に、よみがえったイエスこそ、神の子であると伝えている。

パウロの答えは、イエスは、神の子で、救い主である、ということである。神は全てを治めておられるから、もし神が望むのであれば、神の子を、ダビデのようにこの世の王国の王として送ることも出来たであろう。しかしダビデの時代、イスラエルの民は決して誤りのない生活をしたわけではない。王であるダビデでさえ、大きな罪を犯した。神は、イスラエルの民に、この世の王国の王、すなわち、良い政治制度や経済環境や軍事力を与えることが、人間の罪の解決や、幸福にはなり得ないことを知っていて、苦難の僕の形をもって自らの分身である神の独り子を、イエスとしてこの世に送られた。問題は、外部の政治制度や経済問題ではなく、人間の心に住みつく罪に気付かせ、その罪を赦し、人間の心をどのように変えて、根本的にどう救い出すかという問題である。

パウロは、政治的にこの世を変えることが信仰的に生きることではなく、この世の権力や、権力を伴う制度には、むやみに逆らうのではなく、従いなさいと言う。無論、信仰の自由を伴う個人の人権を侵す行為には、否を言わなければならないが、日常の制度の中での権力には、すべきことをして、いたずらに抵抗するのではなく従いなさい、とパウロは言う。そして、互いに愛し合うことのほかは、借りがあってはならない。愛は、律法を全うするものであると、信仰における本質的な要因・結論を端的に述べている。さらに、今という刻(カイロス)がどんな刻か、あなたがたは知っているはずだ。それは、キリストの十字架の死と復活から、終わりの日の来臨に至る間の恵みの刻である。終わりの日の来臨は、永遠に待つものではなく、すぐ来ても不思議ではない特別な刻に、あなたがたは生きているのだから、闇の行いを捨て、光の武具を身につけ、日中を歩むように、品位をもって歩もうではないか。酒におぼれたり、みだらな行為や争いやねたみを捨てて、主・イエス・キリストを身にまもって生活し、欲望を満足させるための肉に心を用いてはならない。パウロは、まだローマへは行ったことはないが、今まで、いろいろな教会を開拓し、建設し、導いてきた経験から、恐らく、この世の主権都市ローマで生活している信徒に起っているであろう問題について、ローマの信徒たちへ自身の思いを宣べ伝えている。